The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニジェール・コンゴ語族における動詞派生形と「受動文」
Author(s)	小森, 淳子
Citation	言語文化研究. 2018, 44, p. 33-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68012
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニジェール・コンゴ語族における動詞派生形と「受動文」*

小　森　淳　子

The Derivational Forms and Sentence Constructions of Passives in Niger-Congo Languages

KOMORI Junko

Summary: This article examines the verb derivational forms and construction types of passives in the languages of the Niger-Congo language family in Africa. Three types of passive constructions are recognized in Niger-Congo languages: 1）Typical passive constructions, which have derivational passive verbs with a promoted patient noun as a subject and a deleted or demoted agent noun as an adjunct. This type is typically found in Bantu languages, which have the most abundant derivational verb morphology in the family. 2）Impersonal passive constructions, which have an impersonal subject in an active sentence with a patient noun as an object. This type is the most widely attested throughout the family, from West African languages to Bantu languages. 3）Other “passive-like” constructions, which have transitive/ intransitive verbs with a patient noun as a subject and an arbitral agent noun as an adjunct. This type is primarily found in the Mande and Gur language branches in West Africa and can be seen as the ultimate construction for passives with a patient noun as a subject and no morphological changes to the verb.

キーワード：ニジェール・コンゴ語族，バントゥ諸語，動詞派生形，受動文

0．はじめに

ニジェール・コンゴ語族はアフリカで最大の語族であり，下位には大西洋語派，マンデ語派，クル語派，グル語派，クワ語派，アダマワ・ウバンギ語派，ベヌエ・コンゴ語派などがある（図1参照）。赤道以南のほぼ全域に分布しているバントゥ諸語は，ベヌエ・コンゴ語派に属する。

＊ 本件研究は，科学研究費助成事業（基盤（C））「ニジェール・コンゴ語族における動詞構造の形態・統語論比較研究」（課題番号16K02672，研究代表：小森淳子）のH28–29年度の学術研究助成基金助成金を受けておこなったものである。なお，本稿は日本アフリカ学会第54回学術大会（2017.5.20，信州大学教育学部）にて発表した「ニジェール・コンゴ諸言語の動詞の態（voice）に関する類型論的考察」の内容を発展させ，加筆修正したものである。
本稿の執筆にあたり，二名の査読者から貴重なご指摘やコメントを数多く頂戴いたしました。ここに記して心より感謝申し上げます。

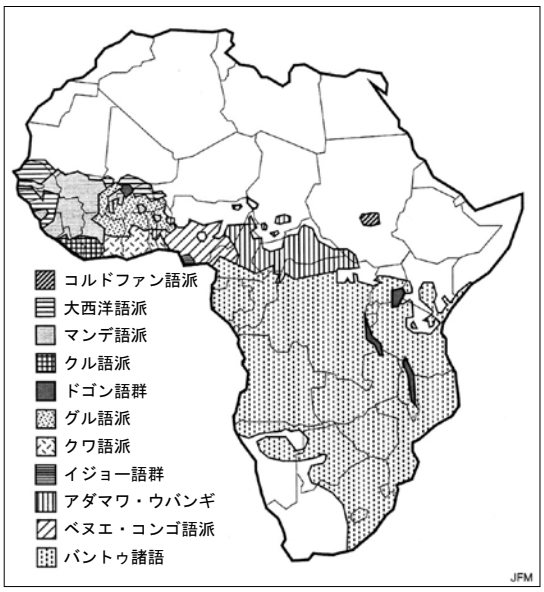

図１　ニジェール・コンゴ語族の分布図（Nurse & Philippson 2003）

Ethnologue によるとアフリカの言語数は2144，その中でニジェール・コンゴ語族の言語数は1525が数えられており，ほぼ3分の2を占めることになる（Simons & Fennig eds. 2017）。これほど大きな語族であるが，基礎語彙や文法要素における音韻の対応から，類型的な集合体ではなく，真に系統的な集合体であると見られている（Williamson & Blench 2000: 11）。

この語族を特徴づけるのは名詞クラス[1)]と動詞構造である。動詞は，意味や結合価を変化させる接辞をとり，適用の *-ed や使役の *-ci, *-ti，相互の *-na などの接辞が再建されているという（Williamson & Blench 2000: 39）。名詞クラスとともに，動詞の接辞が最もよく保持されているのはバントゥ諸語であり，その他の語派や語群では，簡素化されているか，全くなくなっている場合もある。したがって語族全体をみると，動詞は高度に膠着的な形態を示すものから孤立的なものまで多様な形態が見られ，統語的な特徴も形態に関連してバリエーションを示すことになる。

ここでは，受動接辞を加えて形態変化した動詞を「受動形」と呼び，動詞の受動形と受動文に焦点を当てて考察対象とする。典型的な受動文とは一般に，動詞に形態変化が見られ，対応する能動文の目的語（対象：theme）が主語に昇格し，もとの主語（行為者：agent）が降格するか，まったくあらわれない文である。受動文には対応する能動文があるので，統語的には表されなくても，動詞の概念的な意味として行為者が含意されていなければならない（Keenan 1985, Shibatani 1985, Siewierska 2013）。

1）名詞クラスとは，接辞による名詞分類体系で，名詞の単複の交替を表したり，名詞修飾語や動詞との呼応関係を表したりする。

ウエルマーズによると，ニジェール・コンゴ語族ではバントゥ諸語以外に上述のような典型的な受動文は見られず，受動文に相当する文は「非人称主語受動文」（impersonal passive）と呼ばれる能動文か，状態構文（stative construction）で表されるという（Welmers 1973: 341）。それを踏まえて，ニジェール・コンゴ語族全体の受動文（あるいは受動文に相当する文）をみると，おおよそ次の 3 つに分けることができる。

1） バントゥ諸語に典型的に見られる，受動形を用いる受動文。
2） 語族全体に広く見られる，非人称主語受動文。
3） 一部の語派に見られる，他動詞と同形の自動詞が受動の意味を表す文。

本稿では，文献資料から得られるデータを中心に，ニジェール・コンゴ語族の受動形と受動文についてみていき，その地理的，通時的な特徴について考察することを目的とする。次節以降において，上記の1)～3）を順に見ていく。まず，典型的な受動形，受動文が見られるバントゥ諸語を取り上げ，その特徴について概観し，バントゥ諸語においても非人称主語受動文が広がりつつあることを見る。次に，バントゥ諸語以外の動詞の形態と受動文（に相当する文）について概観し，語族全体の地理的分布と通時的な変化についての考察を試みる。

1．バントゥ諸語の受動形と受動文

バントゥ諸語はナイジェリアとカメルーンの国境付近を故地として，西部から東部，南部へと拡散していき，赤道以南のほぼ全域に広がっている。

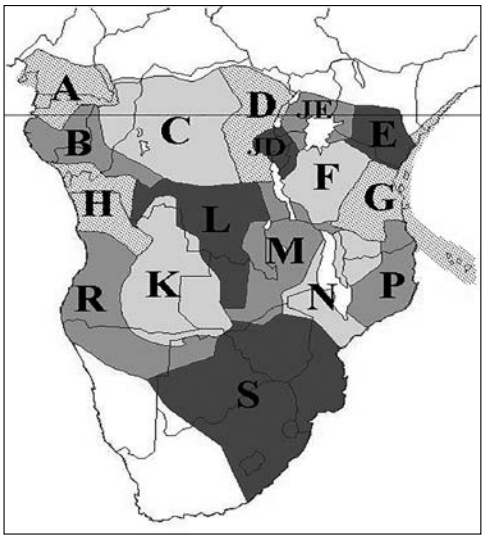

図 2　バントゥ諸語のゾーン区分（米田他 2012）

バントゥ諸語には500以上の言語があるが，分散と分岐の歴史が浅く，全体によく似た語彙と構造を保持している。バントゥ諸語という場合，一般に「狭義のバントゥ諸語」（Narrow Bantu）を指し，系統的に近い諸言語[2)]とともにバントイド語群（Bantoid）を形成しており，さらにバントイド語群はベヌエ・コンゴ語派に属している（Williamson & Blench 2000: 35）。バントゥ諸語はガスリーの分類（Guthrie 1971）によって，図2のようなゾーンに分類されている。アルファベットによるゾーン記号は地理的な分類であり，必ずしも系統的な分類を示すものではない。バントゥ諸語の各言語は，これらのゾーン記号とそれぞれに振られた数字を組み合わせて，たとえばマカア語はA83というように示すのが慣例となっている。本稿ではMaho（2003）の示す改訂版の分類番号を参照する。

1.1. バントゥ諸語の受動形

バントゥ諸語は動詞の派生接辞が豊富で，11の接辞が再建されており，受動接辞の祖形は *-ʊ-/-ibʊ- である[3)]（Schadeberg 2003: 72）。この祖形を引き継ぐ形態は，特に東部と南部のE，F，G，JD/E，M，N，P，R，Sのゾーンの諸言語によくみられる。西部のA～D，H，K，Lのゾーンでは，受動接辞は失われたり，残存形のみに残っているなど変化が著しい。以下に，東・南部ゾーンの祖形の *-ʊ-/-ibʊ- を引き継ぐ受動形の例をあげる。受動接辞は語根と動詞末尾辞（-a）の間に入るが，接辞の形は言語によって個別の変化がみられる。（1）のギクユ語の例では，受動接辞と末尾辞が融合した形になっている。

（1） ギクユ語（Gikuyu）（E51）（Mugane 1997）

-rig-a	「叩く」	＞	-rig-wo	「叩かれる」
-hor-a	「洗う」	＞	-hor-wo	「洗われる」

（2） ベンデ語（Bende）（F12）（阿部 2006）

-jíhágh-a	「殺す」	＞	-jíhágh-w-a	「殺される」
-li-ă	「食べる」	＞	-li-íbhw-a	「食べられる」

（3） スワヒリ語（Swahili）（G42）（Mkude 2005）

-vunj-a	「壊す」	＞	-vunj-w-a	「壊される」
-p-a	「与える」	＞	-p-ew-a	「与えられる」

（4） フンデ語（Hunde）（JD51）（Kaji 1992）

-búlir-a	「噛む」	＞	-búlir-w-a	「噛まれる」
-nyw-a	「飲む」	＞	-nyw-êbw-a	「飲まれる」

2）カメルーン・ナイジェリア国境あたりの草原バントゥ語群（Grassfields Bantu）やティヴ語群（Tivoid）などがある。

3）受動形以外の派生接辞の祖形には，次のものが挙げられている。*-i-/-ici- causative, *-ɪl- dative（applicative），*-ɪk- impositive, *-ɪk- neuter, *-am- positional（stative）, *-an- associative（riciprocal）, *-ag- ～ -ang- repetitive, *-al- extensive, *-at- tentive（contactive）, *-ʊl-; -ʊk- separative tr.; itr.（reversive）

(5) ベンバ語（Bemba）（M42）（Kula & Marten 2010）

-peel-a	「与える」	＞	-peel-w-a	「与えられる」

(6) チェワ語（Chewa）（N31）（Mchombo 2004: 91）

-phík-á	「料理する」	＞	-phík-ídw-á	「料理される」

(7) マコンデ語（Makonde）（P23）[4]（Odden 2003: 539）

-lomb-a	「娶る」	＞	-lomb-w-a	「娶られる」
-talak-a	「料理する」	＞	-talak-eegw-a	「料理される」
-lim-a	「耕す」	＞	-lim-iigw-a	「耕される」

(8) マクア語（Makhuwa）（P31）[5]（Kisseberth 2003: 556）

-lṵm-a	「叩く」	＞	-lṵm-íy-a	「叩かれる」

(9) ヘレロ語（Herero）（R31）[6]（米田 2012）

-tjang-a	「書く」	＞	-tjang-w-a	「書かれる」

(10) ズールー語（Zulu）（S42）（神谷 2012）

-shay-a	「叩く」	＞	-shay-w-a	「叩かれる」
-mb-a	「掘る」	＞	-mb-iw-a	「掘られる」

受動形を用いて受動文が作られる場合，能動文の目的語（対象）が主語になり，主語（行為者）が降格して，任意に前置詞句で表される。スワヒリ語とベンバ語の能動文と受動文の例をあげる[7]。

(11) スワヒリ語（G42）（Mkude 2005）

a. Sara	a-me-vunj-a	kiti		「サラがいすを壊した」
1サラ	S1-PERF- 壊す -F	いす		
b. kiti	ki-me-vunj-w-a		(na Sara)	「いすが（サラに）壊された」
7いす	S7-PERF- 壊す -PASS-F		by サラ	

(12) ベンバ語（M42）（Kula & Marten 2010）

a. Nsáma	á-alí-péél-a	umwáana	indáláma
1ンサマ	S1-PAST- 与える -F	子供	お金

「ンサマが子供にお金を与えた」

4）マコンデ語の受動接辞 -w- は，「娶られる」のように語彙化されたわずかの語にのみ見られ，新しい -eegw-/-iigw- が生産的な接辞として使われている。

5）いくつかの方言では -iw- という形があり，-iw- から -iy- に変化したようである。

6）R ゾーンは，アンゴラ，ナミビアなど地理的に見れば西部に位置するが，受動接辞については，東・南部の諸言語と同様，祖形を保持している。

7）グロスは本稿で設定した共通のものを当て，原典のグロスを簡略化して示すこともある。本稿のグロスは以下の通り。DEF 限定，DS 派生接辞，EMPH 強調，F 動詞末尾，FC 焦点，IMPS 非人称代名詞，INTR 自動詞化接辞，NEG 否定，O 目的接辞／目的代名詞，PASS 受動接辞，PAST 過去，PERF 完了，PF 完了語尾，PL 複数，PRES 現在，PROG 進行，S 主語接辞／主語代名詞，1s 1 人称単数，3s 3 人称単数，3pl 3 人称複数。

b. umwáana á-alí-péel-w-a indáláma (kulí Nsáma)
1 子供 S1-PAST- 与える -PASS-F お金 by ンサマ
「子供が（ンサマに）お金を与えられた」

西部のA～Cゾーンのバントゥ諸語では，祖形の *-ʊ-/-ibʊ- を引き継ぐ受動形はほとんど見られなくなっているが，わずかばかり，以下のような例を見ることがきる[8)]。

(13) ヴィヤ語（Viya）（B301）（Van der Veen 2003: 390）

-pɛk-a	「つかむ」	＞	-pɛk-u	「つかまれる」

(14) マカア語（Makaa）（A83）（Heath 2003: 343, 346）

bwéɛ́d	「着せる」	＞	bwéɛ́d-òw	「着せられる」
yə́	「与える」	＞	yə́-yòw	「与えられる」

マカア語の受動形を用いた受動文の例をあげる。マカア語では行為者はあらわれることはできない。

(15) マカア語（A83） （Heath 2003: 346）

mùùd	nyə̀	à	yə́-yòw	kúwò	「その人はニワトリを与えられた」
人	S3s	PAST	与える -PASS	ニワトリ	

祖形の *-ʊ-/-ibʊ- を引き継ぐ受動接辞は，東・南部ゾーンで比較的よく保持されているが，バントゥ諸語全体を見ると衰退の方向にあると考えられる。東・南部ゾーンの言語でもこの接辞を失っている言語が散見される。祖形由来の受動接辞を失っている言語では，別の自動詞化接辞[9)]が受動の意味を表すことがある。下の（16）は，東部ゾーンのマテンゴ語（N13）の例である。

(16) マテンゴ語[10)]（Matengo）（N13） （米田 2000）

-hṵ́l-a	「脱ぐ」	＞	-hṵ́l-ik-a	「脱げる」
-bɛ́lɛk-a	「生む」	＞	-bɛ́lak-ɛk-a	「生まれる」
-tógol-a	「娶る」	＞	-tógul-ek-a	「娶られる」

バントゥ諸語の名詞についている番号はクラス番号であり，その名詞と呼応する動詞内の接辞にも，同じ番号が振られている。

8) 他に，Pove（B22c），Tsogo（B31），Ngiri（C30），Beo（C44），Kele（C55）などの言語にも，祖形由来の受動接辞が見られるという（Grégoire 2003: 365）。

9) 動詞の項を減らして自動詞化する接辞は，状態接辞（stative）や中立接辞（neuter）などと呼ばれるが，ここでは単に自動詞化接辞と呼んでおく。

10) マテンゴ語の自動詞化接辞は -ik-/-ek-/-ɛk-（語根の母音に調和する）である。2つ目と3つ目の例が受動的な意味を表している。-bɛ́lɛk- のように，語源的に拡大辞が含まれる語根の場合，自動詞化接辞がつくと語根の母音に変化が見られる。詳細は米田（2000: 135pp.）参照。

また，ニョレ語（JE33）でも受動接辞が失われつつあるようだが，一部の語彙には残っているという[11]（宮﨑，私信）。マテンゴ語と同じように，自動詞化接辞 -ih-/-eh- が受動の意味を表すことがある。この派生形を用いて受動文が作られる場合，（17b）のように，前置詞なしで行為者があらわれることができる。

（17） ニョレ語（Nyole）（JE33）（宮﨑 2007，宮﨑 私信）

a.	-sal-á	「切る」	＞	-sal-íh-á	「切れる」
	-jéh-á	「笑う」	＞	-jéh-éh-á	「笑われる」
	-lum-á	「咬む」	＞	-lum-íh-á	「咬まれる」

b. a-ø-lum-ih-á ембwá 「彼は犬に咬まれた」
S3s-PAST- 咬む -INTR-F 犬

西部ゾーンでは，祖形の *-am- に由来する自動詞化接辞が受動を表す例が見られる。特に B，C，D，H ゾーンで見られる。

（18） バボレ語（Babole）（C101）（Leitch 2003: 415）

-bímb-a	「叩く」	＞	-bímb-ám-a	「叩かれる」

（19） リンガラ語（Lingala）（C36d）（Guthrie & Carrington 1988）

-lob-a	「話す」	＞	-lob-am-a	「話される」
-kát-a	「切る」	＞	-kát-am-a	「切られる」

この派生形を用いた受動文では，行為者を任意にとることができる。コンゴ語（H16）の受動文の例をあげる。

（20） コンゴ語（Kongo）（H16）（Bostoen and Mundeke 2011: 73）

bana ke-bul-am-a （na tata） 「子供たちは（父に）叩かれる」
子供 PRES- 叩く -PASS-F by 父

B ゾーンのムブウン語（B87）には，祖形の *-am- に由来すると考えらえる -aa という自動詞化接辞がある。受動的な意味を表すが，行為者があらわれることはできない。

（21） ムブウン語（Mbuun）（B87）（Bostoen and Mundeke 2011: 101）

a. iyéŋ la-tóŋ-aa le akaa 「屋根は藁で作られている」
5 屋根 S5- 建てる -INTR with わら

b. ekwá e-láám-aa ka mbaa 「ヤムは火で料理されている」
8 ヤム S8- 料理する -INTR on 火

11） 次のような例である。-sal-a「生む」＞ -sal-iw-a「生まれる」
-ng'angul-a「負かす（勝つ）」＞ -ng'angul-w-a「負かされる（負ける）」

西部ゾーンでは他に，受動を表す独自の接辞もみられる。Aゾーンのバサア語（A43）では4つの異形態をもつ接辞，エトン語（A71）では -bàn という接辞が受動を表す。それぞれの受動形と受動文の例をあげる。

（22） バサア語（Basaá）（A43）[12] （Hyman 2003: 276, 278）

a. cé	「壊す」	＞	cí-bâ	「壊される」
ɓɔŋ	「する」	＞	ɓoŋ-a	「される」
hɛŋɛl	「変える」	＞	hɛŋl-a	「変えられる」
jês	「食べさせる」	＞	jés-na	「食べさせられる」

b. ɓɔŋgɛ́ ɓá ń-tí-bá bíjɛ́k
子供たち S3pl PRES- 与える -PASS 食べ物
「子供たちは食べ物を与えられる」

（23） エトン語（Eton）（A71） （Van de Velde 2008: 125, 298）

a. bwàb	「叩く」	＞	bwàà-bàn	「叩かれる」
tág	「並べる」	＞	tág-bân	「並べられる」

b. à-ŋgá-wé-bân èèy mbú 「彼は犬に殺された」
S3s-PAST- 殺す -PASS with 犬

祖形を引き継ぐ受動接辞は西部ゾーンではほとんど見られず，また上記のように独自の受動接辞がみられることがあるが，これらは生産的に受動文を作るものではない。（23b）のような受動接辞を用いる文は，実際には限られた例であり，エトン語ではこのような例はほとんどない（Van de Velde 2008: 125）。また，祖形由来の受動接辞をもつ東・南部ゾーンの言語であっても，受動接辞を用いる受動文は生産的でないことがある。たとえばベンバ語（M42）では，受動接辞を用いる受動文は，先に見た（12b）の「与える」のような限られた語彙にのみ可能であって，生産的でない（Kula & Marten 2010: 126）。

バントゥ諸語全体を見ると，祖形由来の受動接辞は衰退の方向にあり，受動接辞による受動文も生産性を失う傾向にあると考えられる。その一方で，バントゥ諸語において生産的にみられつつある受動文は「非人称主語受動文」である。上述のベンバ語にしろ，エトン語にしろ，生産的な受動文はもっぱら「非人称主語受動文」で表される（Kula & Marten 2010: 126, Van de Velde 2008: 303）。次節において詳しく見ていくことにする。

12）バサア語の受動接辞の基底形は，出典では示されていない。CVの語根につくときは語根の母音変化を伴って -ba がつき，CVC/ CVVの語根につくときは語根の母音変化を伴って -a がつく。それ以上に長い語根では語根の母音の脱落を伴って -a がつき，使役動詞には -na がつく。なお，バサア語の受動文では，行為者は前置詞 ni を伴って任意にあらわれることができる。

1.2. バントゥ諸語の非人称主語受動文

ウエルマーズが指摘するように，ニジェール・コンゴ語族では「非人称主語受動文」(impersonal passive，以下 IP 文）が広く見られるが，バントゥ諸語においても IP 文が，特に西部ゾーンを中心に見られ，また東・南部ゾーンにも広まりつつある。IP 文では動詞の形態が変化せず，主語（接辞）を 3 人称複数（または 3 人称単数）の「非人称」にして，行為者の名詞句が削除（あるいは降格）される。対象の名詞句は目的語の資格のまま残る。「受動文」とはいえ統語的には能動文の形式であり，たとえば，字義どおりでは「彼らがその子どもを殴った」という能動文が「その子どもが殴られた」という受動の意味を表すということである。受動接辞のないムブウン語（B87）の例をみてみよう。(24a）が能動文，(24b）がそれに対する IP 文である。

(24)　ムブウン語（B87）（Bostoen & Mundeke 2011: 82）

a.	ɔkáár	á-dzim-i	mbáa	「女が火を消した」（能動文）
	1 女	S1- 消す -PERF	9 火	
b.	mbáa	bá-é-dzim-i		「火が消された」（IP 文）
	9 火	S3pl-O9- 消す -PERF		
c.	mbaa	baa	bá-（é-）dzim-i	「火は彼らが消した」（トピック文）
	9 火	2 彼ら	S2-（O9-）消す -PERF	

(24b）の IP 文では行為者は削除され，主語接辞は 3 人称複数の接辞（ba-）になっている。対象は動詞の前におかれ，動詞は対象に呼応する目的接辞（é-）をとっており，対象が目的語のままであることがわかる。ムブウン語の IP 文では対象を動詞の前におくことが義務的である。この IP 文は一見，目的語が前置されたトピック文のように見える。しかし，ムブウン語の場合，前置された目的語がトピックである場合は，(24c）のように，目的接辞との一致は義務的ではなく任意であり，また 3 人称複数の「彼ら」が主語として認識されている場合は，主語接辞の前に代名詞である baa「彼ら」がおかれるのが普通である。それゆえ，(24b）の IP 文はトピック文ではなく，「火が消された」という受動の読みになる（Bostoen & Mundeke 2011: 82–83)。

他の IP 文の例をグチリク語（K38b）にみてみよう。主語が 3 人称複数の接辞であらわされ，対象の「彼」が目的接辞になっていて，受動の意味を表している。

(25)　グチリク語（Gciriku）（K38b）（Sommer 2003: 578）

βa-nà-mù-óɣona	na-ʂitíki	「彼は根っこで叩かれた」
S3pl-PAST-O3sg- 叩く	with- 根っこ	

ムブウン語やグチリク語では受動接辞がないが，受動接辞がある言語においても，一般的な受動文は IP 文の方が普通である場合がある。たとえば，東部ゾーンのケレウェ語（JE24）では，「私は叩かれた」という受動文は，(26a）のように受動形を用いる文も可能であるが，(26b）の

ようなIP文の方が一般的であり，（26a）のような文は普通は用いられないという。

（26） ケレウェ語（Kerewe）（JE24）（小森 2003）

a. n-a-téél-w-a 「私は叩かれた」
S1s-PAST- 叩く -PASS-F

b. βa-a-n-teel-a 「私は叩かれた」（IP文）
S3pl-PAST-O1s- 叩く -F

ケレウェ語で受動形が用いられるのは，-lem-w-a「疲れる」や -swel-w-a「娶られる」，-zaal-w-a「生まれる」のような語彙化している動詞である。先に見たマテンゴ語やニョレ語でもIP文が用いられる。マテンゴ語のIP文は主語が「誰か」で3人称単数の主語接辞をとる。

（27） マテンゴ語（N13）（Yoneda 2010: 145）

mundu	ju-m-teg-iti	Kapenga	「カペンガは呪われた」
誰か	S3s-O1- 呪う -PF	1カペンガ	

また，東部ゾーンのロンボ語（E623）では，生産的な受動接辞 -w- がみられるが，「愛する」などのような状態を表す動詞では，受動文は（28a）のような受動形によるものは不可で，（28b）のようなIP文のみが ϕ 可能である[13)]。

（28） ロンボ語（Rombo）（E623）（品川，私信）

a. *du-ϕ-kund-w-a （私たちは愛されている）
S1pl-PRES- 愛する -PASS-F

b. ve-ϕ-du-kund-i 「私たちは愛されている」（IP文）
S3pl-PRES-O1pl- 愛する -F

前節で見たようにベンバ語も受動接辞をもつが，一般的な受動文はIP文で表される方が普通であり，（12b）で見たような受動形を用いる文は，限られた動詞のみ可能である。ベンバ語のIP文では，行為者が付加詞として任意にあらわれることができる。

（29） ベンバ語（M42）（Kula & Marten 2010: 118）

a. bá-alí-ly-a	ífyákulya	（ku mumbúlu）
S3pl-PAST- 食べる -F	食べ物	by 野犬
b. ífyákulya	bá-alí-ly-a	（ku mumbúlu）
食べ物	S3pl-PAST- 食べる -F	by 野犬

13）受動接辞を用いる受動文は，状態を表す動詞以外では可能である。以下のような例がある。
ex. ngi-a-loli-w-a 「私は見られた」
S1s-PAST- 見る -PASS-F

「食べ物が（野犬に）食べられた」

ベンバ語のIP文では，（29）の2つの文のように，対象の名詞句は動詞の前後どちらにもあらわれることができ，対象と呼応する目的接辞は任意である[14)]。

ルンダ語（L52）のIP文でも，行為者の付加詞は任意にあらわれえる。また，対象の名詞句も，動詞の前後どちらにもあらわれることができるが，前置される場合，無生物であっても目的接辞は義務的である。下の例ではnyikabu「果物」が対象の名詞句で，これに呼応する目的接辞はyi-である。

（30） ルンダ語（Lunda）（L52）（Kawasha 2007: 40）

a. a-a-（yi-）nat-a　nyikabu　（kúdi　atuási）
S3pl-PAST-（O4-）捨てる-F　4 果物　by　子供たち

b. nyikabu　a-a-*（yi-）nat-a　（kúdi　atuási）
4 果物　S3pl-PAST-O4- 捨てる-F　by　子供たち
「果物が（子供たちに）捨てられた」

行為者を伴うIP文は，主にザンビア，アンゴラのH，K，L，Mゾーンの言語に見られる。キンブンドゥ語（H21）の例もあげておく。

（31） キンブンドゥ語（Kimbundu）（H21）（Keenan 1985）

Nzua　a-mu-mono　kwa　meme　「ジョンは私に見られた」
1 ジョン　S3pl-O1- 見た　by　私

以上に見たように，受動形のない言語だけでなく，受動形をもつ言語でもIP文が見られ，また受動形による受動文は限られた動詞のみになっている傾向が見られる。西部から東部，南部へとバントゥ諸語が拡散してきた歴史を考えると，バントゥ諸語においては受動形の生産性が失われ，IP文が受動文の主流になる変化が進んでいくのではないかと考えられる。

このことはニジェール・コンゴ語族全体にもいえる。祖語にあったと推察される受動接辞や受動形は失われつつあり，受動文は受動形を用いずにIP文や，後述するような自動詞文で表されるようになる。このような変化が語族全体にみられると考えられる。語族の故地は不明であるが，少なくとも西アフリカから広がり，東に位置するバントゥ諸語は周辺に位置づけられる。受動接辞が失われるという変化が中心から周辺に向かって進んできたと考えると，周辺に位置

14）ただし，前置される対象が有生物である場合のみ，目的接辞は義務的になる。
a. bá-alí-ít-a　umwáàna　ku mumbúlu
S3pl-PAST- 呼ぶ-F　子供　by 野犬
b. umwáàna　bá-alí-*（mu-）ít-a　ku mumbúlu
1 子供　S3pl-PAST-O1- 呼ぶ-F　by 野犬
「子供が野犬に呼ばれた」

づけられるバントゥ諸語に受動接辞が残っており，それもいずれ失われていくのではないかと推測されるのである。

次節では，バントゥ諸語以外の言語では，もっぱら受動を表す形態というものがほとんど見られないことと，IP 文が一般的であること，さらにその次の節で，他動詞と同形の自動詞が受動の意味を表す言語の例をみていき，受動形と受動文の変化の方向についてさらに考察していく。

2．バントゥ諸語以外の動詞の形態変化と受動文

バントゥ諸語において典型的な受動接辞と受動文は衰退の方向にあるとみられるが，バントゥ諸語以外の言語ではさらにその傾向は強くなる。形態変化のある言語では，派生接辞による自動詞形が状態や再帰，中動，受動などを表す。もっぱら受動をあらわす受動形というものはほとんどみられないが，大西洋語派のフルフルデ語は中動形と受動形を区別する場合がある。下の（32）のように，自分自身に動作がおよぶ中動形と，動作を受ける受動形が異なる形で表される動詞がある。

（32） フルフルデ語（Fulufulde）（大西洋語派）（江口 1992: 860）

能動形	loot-ii	「洗った」（3人称単数・過去）
中動形	loot-ake	「体を洗った」（3人称単数・過去）
受動形	loot-aama	「洗われた」（3人称単数・過去）

大西洋語派はニジェール・コンゴ語族の中では最も西に位置する語派である。東に位置するバントゥ諸語に受動接辞が残っているのと同じように，西に位置する大西洋語派に受動形が残っていると言えるかもしれないが，他の大西洋語派の言語では受動形を区別せず，一つの派生形が状態や再帰，中動，受動などを表すので，フルフルデ語のみに見られる特徴であるとも考えられる。

大西洋語派のウォロフ語には自動詞化する派生接辞 -u/-ku があり，自発や結果の状態を表す。キシ語にも派生接辞 -nŭŋ/-ŋ があり，再帰や受動，状態などを表す。

（33） ウォロフ語（Wolof）（大西洋語派）（Camara 2006）

sang	「入浴させる」	＞	sang-u	「入浴する」
wàññi	「減らす」	＞	wàññi-ku	「減る」

（34） キシ語（Kisi）（大西洋語派）（Childs 1995: 187−9, 259）

loo	「叩く」	＞	loo-nuŋ	「叩かれる」
cùká	「突く」	＞	cùkâ-ŋ	「自分を突く，突かれる」
tɔ̀ɔ́	「洗う」	＞	tɔ́ɔ́-nŭŋ	「自分を洗う，自分のために洗う」

キシ語のこの派生接辞は，動詞によっては，「～のために」という適用形のような意味を表すことがあり，その場合は目的語をとる。

(35) キシ語（大西洋語派）（Childs 1995: 188）

a.	í	tɔ́ɔ́-nŭŋ	「私は自分を洗った」
	S1s	洗う -DS	
b.	í	tɔ́ɔ́-núŋ dómàá	「私は自分のためにシャツを洗った」
	S1s	洗う -DS シャツ	

自動詞化するだけではなく，適用形のような役割も合わせ持つ派生接辞は，キシ語に限らず，他の西アフリカの諸言語にもみられる。クル語派のグレボ語では，派生接辞 -e/-ė が使役，適用，受動をあらわす。同じ接辞が使役／適用という項を増やす操作と，受動という項を減らす操作に関わることになる。たとえば，dui「搗く」の派生形 dui-ė は，「～のために搗く」と「搗かれる」のどちらも表し得る。

(36) グレボ語（Grebo）（クル語派）（Innes 1966: 33）

a.	dui-ė	Dȯ	bla	「ドのために米を搗く」
	搗く -DS	ド	米	
b.	ɛ	dui-ė	ne	「それは搗かれた」
	S3s	搗く -DS	EMPH	

また，wɛ は「壊す，壊れる」の意味を表す自他動詞であるが，この動詞の派生形 wɛ-e は，適用の「～のために壊す」，受動の「壊される」のどちらも意味も表し得る。

(37) グレボ語（クル語派）（Innes 1966: 74）

a.	ə	wɛ	nɛ	ne	「彼はそれを壊している」
	S3s	壊す	O3s	EMPH	
b.	ə	wɛ	ne		「それは壊れている」
	S3s	壊れる	EMPH		

(38) グレボ語（クル語派）（Innes 1966: 56−7）

a.	wɛ-e	nɛ	Dȯ	「それをドのために壊す」
	壊す -DS	O3s	ド	
b.	ə	wɛ-e-da	ne	「それは壊された」
	S3s	壊す -DS-PAST	EMPH	

(37b) と (38b) を比較すると，グレボ語には中動と受動の違いがあると言える。ただし，グレボ語に関して，この派生形でのみ受動文が作られるかどうかは，データがないので定かでは

ないが，他のクル語派の例（(42) 参照）からみても，一般的な受動文はIP文が用いられるのではないかと推測される。

アダマワ・ウバンギ語派のドヤヨ語では，自動詞化接辞 -y があり，受動構文をつくるという。

(39) ドヤヨ語（Doyayo）（アダマワ・ウバンギ語派）[15]（Wiering & Wiering 1994: 67）

kok^{2}	bɔ^{1}	le-y^{1}	a^{1}	zạạn^{1}	zaa^{13}
固粥	その	食べる -RESL	at	人	他の

「その固粥は誰かに食べられた」

ドヤヨ語では自動詞化接辞によって形態変化した動詞が受動文を作るようにみえるが，「子どもが生まれた」や「私は追われている」などの受動文は，hi（「彼ら」）が主語であるIP文が観察される（Wiering & Wiering 1994: 226, 243）。ドヤヨ語の場合から考えても，受動を表す動詞形態がみられる言語でも，一般的な受動文はIP文を用いると考えられる。

バブンゴ語には自動詞化接辞 -nə があるが，受動はもっぱらIP文で表される。下の（40a）は他動詞文，（40b）は自動詞文，（40c）はIP文の例である。

(40) バブンゴ語（Babungo）（ベヌエ・コンゴ語派）（Schaub 1985: 209）

a. mə̀	ŋà’	shúufwə̀	「私はドアを開けた」
S1s	開ける : PERF	ドア	
b. shúufwə̀	ŋà’-nə		「ドアが開いた」
ドア	開ける : PERF-INTR		
c. ví	jìa	ŋwə́	「彼は捕まえられた」
IMPS	捕まえる : PERF	O3s	

ヨルバ語は動詞の形態変化が見られない言語で，形態変化なしで他動詞，自動詞に用いられる動詞がある。受動文はもっぱらIP文で表される。動詞 ṣí（開ける／開く）の例とIP文の例をあげる。

(41) ヨルバ語（Yoruba）（ベヌエ・コンゴ語派）（my own data）

a. ó	ṣí	ìlẹ̀kùn		「彼はドアを開けた」
S3s	開ける	ドア		
b. ìlẹ̀kùn	yìí	ṣí		「このドアは開いている」
ドア	この	開く		
c. wọ́n	pa	olè	náà	「その泥棒は殺された」
IMPS	殺す	泥棒	DEF	

15）例文中の単語の右肩の数字はトーンを表す。

他にも多くの言語にIP文の例が見られるが，以下に3言語の例をあげておく。

(42) クラオ語（Klao）（クル語派）（Keenan 1985）

ī	pō	slā	ná	「その家は建てられた」
IMPS	建てる	家	DEF	

(43) ティヴ語（Tiv）（ベヌエ・コンゴ語派）（Abraham 1940: 15）

i	gbwidye	un	「彼は叩かれた」
IMPS	叩く	O3s	

(44) ジュクン語（Junkun）（ベヌエ・コンゴ語派）（清水 1988: 358，Shimizu 1980）

be	ri	ba	ku	dan	Ajì	「彼はアジと呼ばれている」
IMPS	PRES	呼ぶ	O3s	言う	アジ	

ニジェール・コンゴ語族全体を見ると，バントゥ諸語以外の言語においても，動詞の形態変化によって受動をあらわし，それが受動文を作る例は見られる。しかし，生産的な受動文はIP文が主流であると思われる。IP文では行為者が削除されるが，対象が目的語のまま残り，動詞が誰かの行為であることが含意され続ける。能動から受動への態の変換という操作において，対象の主語への昇格よりも，行為者の削除・降格が重要視されていると考えることができる。ニジェール・コンゴ語族における動詞の形態変化による受動形，もしくはそれに類する自動詞形は，態の変換に関わるというよりは，項の減少とそれに伴う動詞の意味の変化に関わると考えられる。

3．形態変化しない自他動詞による「受動文」

これまでに見てきた「受動文」は，動詞が受動形になり対象が主語になる受動文か，動詞の形態，対象の資格は能動文のままで主語だけが非人称になるIP文であったが，ニジェール・コンゴ語族の一部の言語には「第3の受動文」とも呼べる形式がある。それは，動詞が形態変化しないで，対象が主語に昇格する受動文である。次のグル語派のナウドゥム語の例をみてみよう。

(45) ナウドゥム語（Nawdm）（グル語派）（Watters 2000: 211）

a.	nídbá	nyìrá	dáám	wèém	「人々はすばやく酒を飲んだ」
	人々	飲む : PERF	酒	すばやく	
b.	dáám	nyìrá	wèém		「酒はすばやく飲まれた」
	酒	飲む : PERF	すばやく		

動詞は同じ形態であるが，(45a) は行為者の主語と対象の目的語をとる他動詞文であり，(45b)

は対象が主語である自動詞文で，受動の意味を表している。（45b）の自動詞文が受動的な意味を表しているのは，wèém「すばやく」という行為を修飾する副詞が共起しており，行為者が含意されていることからも分かる。

動詞の形態が他動詞，自動詞とも同じで，対象が主語になって受動の意味を表す例は，マンデ語派の言語にも見られる。マンデ語派の言語では，動詞が他動詞か自動詞かによって完了の標識（ここでは「補助詞」と呼ぶ）の形と位置が変わるので，それぞれが他動詞として用いられているのか，自動詞として用いられているのかが分かる。マンディンカ語の例をあげる。

（46） マンディンカ語（マンデ語派）（Creissels 2015: 233）

a. kambaan-óo	ye	nás-óo	feereetoo-bóŋ	kolóŋ-o	kóno
少年 -DEF	PERF	聖水 -DEF	器用に - 注ぐ	井戸 -DEF	中

「その少年はその聖水を井戸の中に器用に注いだ」

b. nás-óo	feereetoo-bón-tá	kolóŋ-o	kóno
聖水 -DEF	器用に - 注ぐ -PERF	井戸 -DEF	中

「その聖水は井戸の中に器用に注がれた」

マンデ語派の基本語順は SOV であり，時制・相・否定などを表す補助詞は，基本的に主語の後ろに置かれる。ただし，完了を表す補助詞には 2 つの形態があり，他動詞と共起する場合は自立した形態が主語と目的語の間に置かれ，自動詞と共起する場合は動詞の後に接辞としてつく。（46a）では動詞が他動詞であり，完了を表す補助詞 ye が主語と目的語の間におかれている。（46b）では動詞が自動詞であり，完了を表す補助詞 -ta が動詞の後についている。（46b）では文頭の位置にある対象（「その聖水」）が主語であり，この文は受動の意味を表している。

マンディンカ語の受動的な意味を表す自動詞文では，行為者はあらわられることはできないが，同じくマンデ語派のバンバラ語では，行為者が付加詞としてあらわれることができる。以下にバンバラ語の他動詞文（a）と，それに対する「受動文」（b）の例をあげる（自動詞につく完了の補助詞は -la/-na である）。

（47） バンバラ語（Bambara）（マンデ語派）（my own data）

a. dònso	yé	sàga	fàga	「猟師が羊を殺した」
猟師	PERF	羊	殺す	
b. sàga	fàga-la	（dònso	fɛ̀）	「羊が（猟師に）殺された」
羊	殺す -PERF	猟師	by	

（48） バンバラ語（マンデ語派）（Kastenholz 1998: 105）

a. à	yé	ò	dúmu	「彼はそれを食べた」
彼	PERF	それ	食べる	

b. ò　dúmu-na　(à　fɛ̀)　「それは（彼に）食べられた」
それ　食べる -PERF　彼　by

上の（47b），（48b）はそれぞれ受動的な意味を表す自動詞文であるが，任意に行為者（後置詞句で表される）をとることができる。

完了の場合は他動詞と自動詞で補助詞の形が異なるが，その他の場合は同じ補助詞の形である。以下の例でも，自動詞文は受動の意味を表している。

(49)　バンバラ語（マンデ語派）（Kastenholz 1998: 105）

a. mùso　bɛ́　dénnin　kò　「女の人が女の子を洗っている」
女　PROG　女の子　洗う

b. dénnin　bɛ́　kò　(mùso　fɛ̀)　「女の子が（女の人に）洗われている」
女の子　PROG　洗う　女　by

(50)　バンバラ語（マンデ語派）（Kastenholz 1998: 105）

a. mɔ̀gɔ　bɛ́ɛ　má　ò　dɔ́n　「全員がそれを知っているわけではない」
人　全て　NEG　それ　知る

b. ò　má　dɔ́n　mɔ̀gɔ-w　fɛ̀　「それは人々に知られていない」
それ　NEG　知る　人 -PL　by

マンディンカ語やバンバラ語の例をみると，一つの動詞が他動詞にも自動詞にも用いられ，また，自動詞が受動の意味も表し得ることがわかる。

同じ動詞の形態で他動詞にも自動詞にも用いられる例は，西アフリカの諸言語に広く見られる。上に見た（37）のグレボ語の wɛ「壊す／壊れる」や，（41）のヨルバ語の ṣí「開ける／開く」などもその例である。ヨルバ語では他に fọ́「壊す／壊れる」，gé「切る／切れる」，gbẹ「乾かす／乾く」，ya「裂く／裂ける」などの例があるが，これらは対象の自然な変化が可能な場合であり，自動詞として用いられる場合は，行為者が含意されていない。それゆえに，ヨルバ語ではたとえば，pa「殺す」や fọ̀「洗う」など，行為者の存在が不可欠である他動詞を自動詞として用いて「受動文」を作ることはできない。マンデ語派の言語やナウドゥム語では，このような他動詞も自動詞として用いることができ，行為者の行為が含意された「受動文」をつくることができるということである。

4．考察

ニジェール・コンゴ語族の「受動文」には，大まかにみて 3 つのタイプがあると言える。①東・南部バントゥ諸語に典型的にみられる受動形による受動文，②西アフリカの諸言語からバ

ントゥ諸語にかけて広くみられるIP文，③マンデ語派，グル語派の言語にみられる行為者が含意される自動詞が対象を主語にとる自動詞文，である。動詞に形態変化がみられ，対象が主語になるという点からみれば，①のみが典型的な受動文であり，②や③は典型的な受動文ではない。②，③に共通するのは，動詞の形態が変化せず，対応する能動文の他動詞と同じ形態ということである。その上で，②は行為者が削除／降格されることによって，③は対象が主語に昇格することによって，それぞれ受動文に相当する意味を表していると言える。

ニジェール・コンゴ語族の動詞の特徴は接辞による動詞の派生であるが，受動形に関しては，全体に生産性を失い，衰退していく方向にあるようにみえる。もちろん，東・南部のバントゥ諸語には生産的な受動形と受動文がみられる言語があり，またフルフルデ語には中動形と区別される受動形が存在しているが，全体の中に位置づけると，特に受動形というのは衰退あるいは他の自動詞形と融合してしまう傾向があるのではないかと考えられる。マンデ語派のバンバラ語では動詞の形態変化がほとんど見られなくなっているが，それでも他動詞化する接辞は確認できる[16)]。それに対して，受動も含めて自動詞化する接辞はなく，基本的に他動詞はすべて自動詞としても用いることができる。形態変化なしで自動詞化するともいえる。

形態変化に乏しい言語では，一つの動詞が他動詞・自動詞のどちらにも用いられることが多い。ヨルバ語やグレボ語のような西アフリカの諸言語に特に見られるが，それは「壊す／壊れる」や「開ける／開く」のように，対象の自然な変化や自発的な動作が可能な場合のみである。しかし，マンデ語派やナウドゥム語の場合は，「殺す／殺される」，「洗う／洗われる」などのように，対象が行為者から行為を受ける場合，つまり受動の意味も自他動詞で表し得るという点が特異である。自他動詞において対象が主語になる場合，対象の自然な変化や自発的な動作のみならず，受動の意味も表し得るということは，自他動詞の意味の拡張ととらえることができる。そのような拡張を通時的な変化ととらえると，マンデ語派やグル語派のナウドゥム語の例がその変化の最先端であるとみることができよう。

ニジェール・コンゴ語族全体の故地や歴史的な変化，語派間の関係などは不明な点が多いが，少なくとも西アフリカの諸語が古く，それゆえ言語の変化も西アフリカの諸語が先に進んでいるということができる。特にマンデ語派はニジェール・コンゴ語族の大きな特徴の一つである名詞クラスが見られず，また動詞の形態変化に乏しく，他の語派との解離が大きいので，早い時期に他の語派と分離したと考えられている（Williamson 1989, Dwyer 1989）。受動接辞や受動形の喪失が進み，受動文がIP文で表される状況が見られ，さらに自他動詞による受動の意味の表出という変化が語族全体の通時的な変化ととらえると，その変化は，西アフリカのマンデ語派からその周辺の語派，さらに東のバントゥ諸語までの地理的な分布の中に見出すことができ

16）派生接辞のlá-が自動詞を他動詞化する例がみられるが，生産的ではなく語彙化している。
jìgin 「降りる」 ＞ lá-jigin 「降ろす」
nà 「来る」 ＞ lá-na 「来させる」

ると言えるのである。

5．おわりに

本稿では，ニジェール・コンゴ語族の動詞の形態と統語の関係を明らかにする一環として，受動形と受動文に焦点をあて，受動接辞による派生形や自動詞化する接辞による形態変化を観察し，受動文に相当する文がどのように表されるかをみてきた。この語族の歴史的な展開と変化を考えると，バントゥ諸語のような周辺部の言語に，典型的な受動形と受動文がみられ，歴史が古く中心的なところでは動詞の形態変化が減少，消滅しつつあり，究極的には同じ形態の自他動詞が受動文に相当する意味も表すようになっているとみることができる。このような変化は，特に結合価を減らす派生に顕著ではないかと思われるが，使役形や適用形など，結合価を増やす派生にも焦点を当てて，さらに総合的に，ニジェール・コンゴ語族の動詞の形態と統語の関係について考察していく必要がある。

参考文献

阿部優子（2006）『ベンデ語（バントゥF.12，タンザニア）の記述研究―音韻論，形態論を中心に―』，博士論文，東京外国語大学

江口一久（1992）「フルフルデ語」，『言語学大辞典』3巻，pp.854–867，三省堂

神谷俊郎（2012）「ズールー語およびングニ諸語（S40）」，塩田勝彦（編），pp.273–287

小森淳子（2003）『ケレウェ語の記述研究―文法・接触による変容・言語文化―』，博士論文，京都大学

塩田勝彦（編）（2012）『アフリカ諸語文法要覧』，渓水社

清水紀佳（1988）「アフリカの諸言語」，『言語学大辞典』1巻，pp.237–439，三省堂

宮﨑久美子（2007）「ニョレ語（バンツー系，ウガンダ）動詞の派生形」，『EX ORIENTE』，pp.251–269，大阪外国語大学言語社会学会

米田信子（2000）『マテンゴ語の記述研究―動詞の構造を中心に―』，博士論文，東京外国語大学

米田信子（2012）「ヘレロ語（R31）」，塩田勝彦（編），pp.257–271

米田信子，小森淳子，神谷俊郎（2012）「バントゥ諸語概説」，塩田勝彦（編），pp.151–155

Abraham, R.C.（1940/1968）*The Principles of Tiv*, Gregg International Publishers.

Bendor-Samuel, John（ed.）（1989）*The Niger-Congo Languages*, Lanham: University Press of America.

Bostoen, Koen & Léon Mundeke (2011) "Passiveness and inversion in Mbuun (Bantu B87, DRC)," *Studies in Language* 35: 1, pp.72–111, John Benjamin Publishing Company.

Camara, Sana (2006) *Wolof Lexicon and Grammar*, The National African Language Resource Center, University of Wisconsin-Madison.

Childs, G. Tucker (1995) *A Grammar of Kisi: A Southern Atlantic Language*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Creissels, Denis (2015) "Valency properties of Mandinka verbs," in Malchukov, Andrej & Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World's Languages* vol.1, pp.221–259, Berlin: De Gruyter Mouton.

Dwyer, David J. (1989) "Mande," in Bendor-Samuel (ed.) pp.47–65.

Grégoire, Claire (2003) "The Bantu languages of the forest," in Nurse & Philippson (eds.), pp.349–370.

Guthrie, Malcolm (1971) *Comparative Bantu,* vol.2, Farnborough: Gregg Press.

Guthrie, Malcolm & John F. Carrington (1988) *Lingala: Grammar and Dictinary*, Baptist Missionary Society, London: England.

Heath, Teresa (2003) "Makaa (A83)," in Nurse & Philippson (eds.) pp.335–348.

Heine, Bernd & Derek Nurse (eds.) (2000) *African Languages: An Introduction*, Cambridge University Press.

Hyman, Larry M. (2003) "Basaá (A43)," in Nurse & Philippson (eds.) pp.257–282.

Innes, Gordon (1966) *An Introduction to Grebo,* SOAS, University of London.

Kaji, Shigeki (1992) *Vocabulaire Hunde*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

Kastenholz, Raimund (1998) *Grundkurs Bambara (Manding) mit Texten*, Köln: R. Köppe.

Kawasha, Boniface (2007) "Passivization in Lunda," *Journal of African Languages and Linguistics* 28, pp.37–56, Walter de Gruyter.

Keenan, Edward (1985) "Passive in the world's languages," in Shopen,Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description*, Vol.1, pp.243–281, Cambridge University Press.

Kisseberth, Charles (2003) "Makhuwa (P30)," in Nurse & Philippson (eds.) pp.546–565.

Kula, Nancy & Lutz Marten (2010) "Argument structure and agency in Bemba passives," in Legère, Karsten & Christian Thornell (eds.) *Bantu Languages: Analyses, Description and Theory*, pp.115–130, Köln: Rüdiger Köppe Verlag.

Leitch, Myles (2003) "Babole (C101)," in Nurse & Philippson (eds.) pp.392–421.

Maho, Jouni (2003) "A classification of the Bantu languages: An update of Guthrie's referential system," in Nurse & Philippson (eds.) pp.639–651.

Mchombo, Sam (2004) *The Syntax of Chichewa*, Cambridge University Press.

Mkude, Daniel J.（2005）*The Passive Construction in Swahili*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

Mugane, John M.（1997）*A Paradigmatic Grammar of Gĩkũyũ*, Stanford: CSLI Publications.

Nurse, Derek & Gérard Philippson（2003）"Introduction," in Nurse & Philippson（eds.）pp. 1−12.

Nurse, Derek & Gérard Philippson（eds.）（2003）*The Bantu Languages*, London: Routledge.

Odden, David（2003）"Rufiji-Ruvuma（N10, P10−20)," in Nurse & Philippson（eds.）pp. 529−545.

Schadeberg, Thilo C.（2003）" Derivation," in Nurse & Philippson（eds.）pp. 71−89.

Schaub, Willi（1985）*Babungo*, London: Croom Helm.

Shibatani, Masayoshi（1985）"Passives and related constructions: A prototype analysis," *Language* 61, pp. 821−848.

Shimizu, Kiyoshi（1980）*A Jukun Grammar,* Afro-Pub.

Simons, Gary F. & Charles D. Fennig（eds.）（2017）*Ethnologue: Languages of Africa and Europe 20th edition,* Dallas: SIL International.

Siewierska, Anna（2013）"Passive Constructions," in Dryer, Matthew S. & Martin Haspelmath（eds.）*The World Atlas of Language Structures Online*, Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. http://wals.info/chapter/107（accessed on 2017/08/21）

Sommer, Gabriele（2003）"Western Savanna（K,R)," in Nurse & Philippson（eds.）pp. 566−580.

Van der Veen, Lolke J.（2003）"The B30 language group," in Nurse & Philippson（eds.）pp. 371−391.

Van de Velde, Mark（2008）*A Grammar of Eton*, Berlin: Mouton de Gruyter.

Watters, John R.（2000）"Syntax," in Heine & Nurse（eds.）pp. 194−230.

Welmers, William E.（1973）*African Language Structures*, Berkeley: University of California Press.

Wiering, Elisabeth & Marinus Wiering（1994）*The Doyayo Language: Selected Studies*, The Summer Institute of Linguistics and The University of Texas at Arlington.

Williamson, Kay（1989）"Niger-Congo Overview," in Bendor-Samuel（ed.）pp. 3−45.

Williamson, Kay & Roger Blench（2000）"Niger-Congo," in Heine & Nurse（eds.）pp. 11−42.

Yoneda, Nobuko（2010）" 'Swahilization' of ethnic languages in Tanzania: The case of Matengo," *African Study Monographs*, 31（3), pp. 139−148.